茂原市史編さん事業の活動
（近現代史調査その二）

茂原市史編さん事業は、市制施行七十周年を迎えた昨年度末に『茂原市史資料編Ⅰ（原始・古代、中世考古）』が刊行され、いよいよ市史刊行が本格化してきました。

近現代部門では、令和元年度から四年度までに九名の調査執筆委員の先生方が任じられ、各先生方はご自身の研究の傍ら、茂原市域の近現代史料の調査研究をはじめられました。特に宮間純一先生（中央大学文学部教授）を中心として、定期的に勉強会が開かれています。この勉強会では、昭和四十一年に発行された『茂原市史』の近現代史部分の輪読会を手はじめに、各先生方が注目している事柄のミニレポート報告なども行っています。また、緊急事態宣言下においては、新型コロナウイルス感染症対策のために、ウェブ会議システムを使ったリモート会議も取り入れてきました。

一方、茂原市立美術館・郷土資料館では、令和二年一月二十五日から三月三十一日まで第二回テーマ展「郷土の先覚者　千葉三郎」を開催しました。千葉三郎は明治二十七年一月、千葉天夢（眼科医、長生高校の前身大成館創立者）の三男として上埴生郡鶴枝村上永吉に生まれました。大正八年東京帝国大学法科大学（法学部）法律学科卒業後、プリンストン大学に留学し経済学を学びました。帰国後、鐘淵紡績株式会社社長の武藤山治の片腕として大日本実業組合連合会理事に就任しました。大正十四年、衆議院議員補欠選挙に立候補し初当選すると、以後戦前、戦後と合わせて十二回の当選を果たしました。その間、第一次鳩山一郎内閣では労働大臣を務めています。

テーマ展「郷土の先覚者千葉三郎」をきっかけにして、千葉本家千葉彌幸氏（永吉の眼科名誉院長）を介して千葉三郎の長男健司氏と孫祐三氏より日記、書簡、覚書、アルバム等の「千葉三郎関係資料」が茂原市へ寄贈されました。加藤時男先生をはじめとする資料調査員と市史編さん委員会事務局によって令和二年十一月から令和四年二月まで資料整理をし、令和五年三月三十一日には、『茂原市史調査報告書第八集　千葉三郎関係文書調査報告書』（上）（下）が発行されました。上巻では「千葉三郎日記」が戦中から戦後の保守合同（昭和三十年）に至るまでの時期を中心として抄出して紹介されています。また、下巻では、千葉三郎が政界に進出した大正十四年の衆議院議員補欠選挙および昭和三年の最初の普通選挙をめぐる関係史料、千葉三郎宛ての書簡などとともに「千葉三郎関係文書目録」が紹介されています。この報告書は茂原市史編さんに大きく寄与することと期待されています。

▲千葉三郎記念館と銅像
（鶴枝公民館の隣）

▲調査報告書第八集上下巻

「千葉三郎日記」は、中学時代の明治四十三（一九一〇）年から死去する昭和五十四（一九七九）年まで七十年間にわたり書き継がれたものです。この日記の内容は、彼が活動した政界、実業界、教育界、南米開拓事業など幅広い範囲の記録がなされ、激動の時代「明治・大正・昭和」の社会、政治状況を映し出しています。現在、調査執筆委員の手塚雄太先生（國學院大學文学部准教授）を中心に調査分析がなされています。特に、大正末期から昭和初期における政友会と憲政会の二大政党にはさまれた千葉三郎の属する実業同志会の果たした役割がうかがえる史料は少なく貴重なものと言えるでしょう。また、昭和三十年の保守合同に至る戦後政治の大きな分岐点での非吉田茂系の政治家の史料としてこれまた興味深いものでしょう。もちろん自由民主党千葉県連の初代会長ですので、千葉県の戦後政治を語る上でも見逃せない史料でもあります。

今回の市史編さん事業近現代部門では、こうした新発掘の史料を丁寧に読み込みながら刊行に向けた取り組みを進めています。

茂原市史編さん委員会
委員　各務　敬

問合せ
美術館・郷土資料館
☎㉖2131　FAX㉖2132